

# 女庭訓往来を読む(2) 解答

史料 「女庭訓往来倭文鑑」神無月(返信)

〔奥貫家文書三二七二〕

## 【釈文(翻刻、解説文)】

- ① 猪子の御祝、殊に内裏より、  
みの子 いはひ こと うち
- ② 下されたる由、一入めて度思ひ  
くだ よし ひとしほ たくおも
- ③ まいらせ候、今日よりハ老の病も  
けふ おい やまひ
- ④ 怠侍らんと、悦まゐらせ候、さるハ  
おこたりはべ よろこび
- ⑤ 若き女共の、作法宜しからぬ  
わか をんなども さほうよろ
- ⑥ は、上の掟正しからぬにより候、  
かみ おきてたゞ
- ⑦ 上正しければ下は、獨質朴なる  
かみたゞ ひとりすなほ
- ⑧ 者にて候、末の世には親と子の  
もの すゑ よ おや こ
- ⑨ 禮乱れ候、恩に馴過愛に  
れいみだ おん なれすぎあひ  
メグミ
- ⑩ 溺て、親をバ敬ふものとも思はず、  
おぼれ おや うやま おも
- ⑪ 昔ハ親を敬ふ礼をうつして、  
むかし おや うやま れい
- ⑫ 君に仕へしが忠節ある人とす、  
きみ つか ちゆうせつ ひと
- ⑬ 親を疎にする人ハ、君に仕ふる  
おや おろそか ひと きみ つか
- ⑭ の本を忘れたる者也、又嫁づかひ  
もと わすれ もの またよめ
- ⑮ とて、縁につきてからハ、姑に仕る  
えん しうとめ つかふ
- ⑯ 事、親に仕る如くするは古の法也、  
こと おや つかふ こと くにしほ ほう
- ⑰ 女の位より、男の位卑き所へは、  
をんな くらみ をとし くらみひく ところ
- ⑱ 娘を遣らず、姑を敬ハねバ、女の礼  
むすめ や しうとめ うやま をんな れい
- ⑲ を、しらぬになれバ也、末の代には  
すゑ よ

⑳ 姑しうとめを遣つかふのミにて、姑しうとめにつかつかはるゝと

㉑ いふ事ことを知らず、天地始てんちはじめて方

㉒ 禮れいを背そむくハ、人ひとの形かたちながら畜類ちくるゐ

㉓ と同じ心おなこころ也、総すべてて男をんなも女かたちも形

㉔ 能よきは好よき事ことなれ共、己おのれが形かたちに己おのれと

㉕ 迷まよひて、人ひとを侮あなとり心こころを嗜たしなまぬぬ故ゆえに、

㉖ 譏そしらるゝ、只ただ形かたちハ何共なにともあれ、心こころばせ

㉗ の正路しやうろに、義ぎの正たじしきを、男をとこも女をんなも

㉘ 上かみの品しなとぞ文ふみにも候をにこそ、穴賢あなかしこ

㉙ 神無月三日 少将尼せうしやうあま

㉚ せんじのつばね御返事

【読み下し】

猪子の御祝、殊に内裏より、  
下されたるよし、一入めでたく思い  
まいらせ候、今日よりは老いの病も  
怠り侍らんと悦びまいらせ候、さるは  
若き女共の作法宜しからぬ  
は、上の掟正しからぬにより候、  
上正しければ下は独り質朴なる  
者にて候、末の世には親と子の  
礼乱れ候、恩に馴れ過ぎ愛に  
溺れて、親をば敬うものとも思わず、  
昔は親を敬う礼をうつつして、  
君に仕えしが忠節ある人とす、  
親を疎かにする人は、君に仕うる  
の本を忘れたる者也、又嫁づかい  
とて、縁につきてからは、姑に仕うる

【大意】

猪子のお祝い（猪子餅）は特に内裏からいただいたようなので、いっそうめでたく思われます。今日からは老いの病も出なくなるでしょうと悦んでおります。それにしても若い女たちの作法がよろしくないのは、上

事、親に仕うる如くするは古の法也、  
女の位より、男の位卑き所へは、  
娘を遣らず、姑を敬わねば、女の礼  
をしらぬになれば也、末の代には  
姑を遣うのみにて、姑につかわると  
いう事を知らず、天地始めてより  
礼を背くは、人の形ながら畜類  
と同じ心也、総て男も女も形  
能きは好き事なれ共、己が形に己と  
迷いて、人を侮り心を嗜まぬ故に  
譏らるる、只形は何共あれ、心ばせ  
の正路に、義の正しきを、男も女も  
上の品とぞ文にも候にこそ、穴賢  
神無月三日 少将尼  
せんじのつばねお返事

(に在る人)の決まりが正しくないからです。上が正しければ下も自然に素直な者になるものです。末世には親と子の礼も乱れて、恩に馴れて親の愛に溺れて、親を敬うものとも思わなくなっています。昔は親を敬う礼と同様に、君主に仕えるのが忠節のある人としていました。親をおろそかにする人は、君主に仕える根幹を忘れた者です。又、嫁としての心遣いも、縁付いてから姑に仕える事とは、親に仕えるのと同様にすることは昔からの道理です。自分より低い位の男の所へは娘を嫁に遣りません。姑を敬わないのは、女の礼を知らないからです。末世は姑をつかうばかりで、姑につかわれるということを知りません。天地が始まって以来の礼を背くのは、人の形をしながら畜類と同じ心です。男も女も形がすぐれているのは好いことですが、自分の形に迷って、人を軽くみて心の準備をしないので、人に悪く言われます。形は何であれ、心ばえが正しく道理の正しいのが、男も女も上品であると書物にもございます、あなかしこ。

### 【欄外 絵解き 釈文】

若き女の

位を同じく

るやう、我夫軍に出る

佐法

せずとて親と子の

とき老たる母をわれに

幼き時より男女ハ

礼をときたるにも

あづけ給へり、われまた

席を同うせず

父をバあつくうやまへと

うけがひたれば、今その

衣裳も同じ

をしへ給へるなり

約をたがえすて他へ参る

所におかず

「姑に仕る事」

事まことに恥べき事なり、

物をうけとり

漢の世に陳孝婦とて姑に

とて聞いれず、姑を大切

わたすにも

孝行の聞えありし人ハ、十六才

に養ふこと廿八年、姑ミま

手から

にて人のよめとなり、程なく

かりければ田畠をうり葬

手へ

国に軍おこりて夫うち死す

をあつくせしとぞ、よりて

直にせず

孝婦姑に仕へて孝行を尽

陳孝婦といへり

男女同し所に

す、婦が誠の父母其年若

心ばせの正路

ゆあミせず

くしてやもめなるをあはれミ、

心だに誠の

「親と

他へ嫁いらせて世をやすく

道に叶ひ

子の礼」

おくらしめんとふたゝ嫁

道に叶ひ

礼記に父にハ

うけがはずして親にいへ

祈らず

なバ

とても

神かみや

守まもらん

神無月かみなづき

此月芋このつきいもを食しよくすれば

大おほいに益えきあり

此月頭巾このつきづきんにて頭かしらを

つゝむべからず、脳のうを冷ひやせ

バめまひのうれひなし

○霜しもにうたれたる菜な

をおほくくふべからず

かほの色いろあしくなる

といへり